

自らの願いを意識する七夕行事を生かした 保育について

— 幼児の自己肯定感の芽生えと七夕行事との関係性を考える —

恒岡 宗司¹⁾・坪井 美稚子²⁾

1) 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部

2) 大和郡山市立平和幼稚園

Promotion Preschoolers Awareness of Their Own Desires Through a *Tanabata* Event: Thinking about the Relationship between Preschoolers Budding Self-Affirmation and a Festive Event

Munehika Tsuneoka · Michiko Tsuboi

1) *Naragakuen University Narabunka Women's College*

2) *Yamatokoriyama City Heiwa Kindergarten*

我が国の小・中学生や高校生に尋ねた意識調査によると、子どもたちの自己肯定感が低いという結果が報告されている。このことに関して、我が国の子どもたちが抱いている自信のなさや自己を肯定的に評価しない傾向は、他者との比較による要因が大きいのではないかと推察される。こうした現状は、統計的調査が行われている小学校以降の子どもたちだけに特徴的に言えることだろうか。幼児期の子どもは万能感に溢れているとも言われているが、感性豊かな時期に様々な願いや夢をもちながらどのように過ごしてきたかについて、保護者をはじめ保育者は自己肯定感の芽生えの観点から関心をもつ必要があると考える。

本稿では、自己肯定感の芽生えを幼児期の特性に照らして「願い」という表現でとらえ、幼児にとって自分の願いが強く表出される機会である七夕行事を取り上げることにした。短冊に願いごとを書く七夕行事の保育的価値について、先学による心理学の知見や年中行事のもつ性格の観点からの民俗学の研究成果を通して考察する。また、保育者として七夕行事を通してどのように保育を実践していくことが自己肯定感の芽生えにつながっていくかについて、幼稚園5歳児の指導モデルを作成して検証を試みた。

キーワード：自己肯定感、七夕行事、民俗学

1. はじめに

本研究テーマを設定したきっかけは、平成27年8月に国立青少年教育振興機構が公表した「高校生の生活と意識に関する調査報告書〔概要〕—日本・米国・中国・韓国の比較—」¹⁾である。同概要の「7 自分について（自己肯定感等）」の記述を読むと、「『人並みの能力がある』『体力に自信がある』『勉強が得意な方だ』といったことに肯定する割合は低い。また、『自分はダメな人間だと思うことがある』といった項目への肯定する割合は高い。」と述べられており、我が国の高校生の自己肯定感の低さを指摘していることであった。同報告書〔概要〕には4か国の比較として、次のように解説されている。

「『私は人並みの能力がある』『自分の希望はいつか叶うと思う』『私は将来に対し、はっきりした目標をもっている』という設問に対して『そう思う』『まあそう思う』と回答した者の割合は各国とも5割を超えるが、日本の高校生は他の3か国と比べて少ない。また、『自分はダメな人間だと思うことがある』と回答した者の割合は、日本が7割を超え、4か国中もっとも高い。」

それでは年齢の低い小・中学生、さらには幼児期の子ども意識でもこうした実態が当てはまるのであろうか。もし幼児期段階からこうした状況の兆しがみられるとすれば、保育の問題としてもとらえていく必要があるのではないか。このことが筆者らの研究動機となっており、本稿が現職の先生方の保育実践や研修のための参考資料として活用されることを願っている。

2. 研究の内容と方法

2.1 研究の内容と方法

2.1.1 小・中学生の実態調査と保育の問題

小・中学生の実態に関しては、国立教育政策研究所が公表した「平成28年度全国学力・学習状況調査報告書」²⁾がある。本調査は、小学校第6学年と中学校第3学年を対象として平成28年4月19日に実施したものである。筆者は、質問紙調査の調査項目のうちの自己肯定感に関する「(6) 自分には、よいところがあると思いますか」「(9) 将来の夢や目標を持っていますか」の2項目に着目し、4段階評価による選択肢のうちの「当てはまる」（ここではaとする。）、「どちらかといえば、当てはまる」（ここではbとする。）の肯定的回答割合を調べた。

項目(6)では、aは小学校で36.3% (a + bでは76.4%)、中学校では27.5% (a + bでは69.4%)であった。項目(9)では、aは小学校で68.6% (a + bでは85.3%)、中学校では45.1% (a + bでは71.1%)であった。中学生よりも小学生の方が肯定的回答割合の数値は高い。また(6)と(9)を比較すると、自分のよさを自覚している割合に比べて将来の夢や目標をもっていると自覚している割合の方が高いことが読み取れる。

小・中学校では、自分に自信をもていなくても夢や目標はもっている小・中学生が数多く存在していることを再認識する必要がある。このことは、卒業アルバムを見ると一人一人が自分の将来の夢を書いていることから実感できるものである。

自己肯定感に内包される自分のよさや将来の夢や目標は、小学校6年間、中学校3年間の成長過程で様々な経験を通して自覚されていくことが期待されるが、前述した小・中学生対象の調査結果をみれば成長とともに数値が下がっている。一方、幼児の実態については発達段階からみて客観的に把握していくことが難しく、全国規模の調査結果は見当たらない。しかし、自分のよさや将来の夢や目標に対する意識の芽生えを育むためには、幼児が自らの願いをもちそれを意識できることを保育者として援助していくことが重要であると考えられることから、本研究を進めるに当たって次の4点を理解しておく必要がある。

ア 願いをもつことやもっていることが、自己肯定感の構成要素として成立するか。

イ 願いをもつことやもっていることに対して、幼児は自己認識できる発達段階に達しているか。

ウ 幼児期では願いをもつ、もっているという意識が、自己肯定感の芽生えとして位置付けられるか。

エ 幼児に対する自己肯定感の評価は可能か。

これらの点については、心理学や教育学の専門家の研究成果に学ぶこととした。そこから得られた知見をもとに自らの願いを意識できる保育の一手法として年中行事、とりわけ七夕行事を保育に位置付けることを試みた。年中行事に着目した理由は、年中行事には人々の祈りや願いの行為が多く、中には子どもの成長に関わることもみられる。また、子どもが家庭や地域の中で行事に参加し直接体験している場合もある。特に七夕行事には、子どもが行事への参加を通して自分は願いをもっていることを意識化できる価値ある機会であること、願いが実現してほしいことを意識できること、自分の願いを表出できること、そして友達同士で願いや夢を語り合う場になることなどの要素が含まれている。また、七夕行事には日常的な遊びの中でもつ願いとは違った意識をもちながら自己肯定感を芽生えさせていける要素が含まれているのではないかと推論している。

こうした点が幼児期の子どもにも当てはまるのかどうかを考える必要があり、特に幼児が自らの願いをもつことと自己肯定感の芽生えとの関係、七夕行事での願いの意識化と保育との関係について文献調査を行うこととした。また公立幼稚園での七夕行事を中心とした保育実践を通して、これらの関係性についての考察を試みた。

2.1.2 願いをもつことと自己肯定感との関係

幼児が自らの願いをもつことと自己肯定感の芽生えとの関係については、心理学関係の書籍等を調べることとした。心理学の専門家や教育関係機関によって著された文献を読むと、自己肯定感はself-esteemの訳語として用いられているが、self-esteemの訳語としては「自尊感情」が多く使われているようである。古荘純一が著した『日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか—児童精神科医の現場報告—』³⁾では、次のように紹介している。「セルフ・エスティームは、日本語では『自尊感情』の他に、『自尊心』『自負心』『自己評価』『自己尊重』『自己価値』『自己肯定感』などさまざまな訳語があります。…(中略)…『自尊感情』以外のこれらの訳語は、ローゼンバーグのいう定義のうちの、ある一面のみを中心に意味し、必ずしも全体を包括する意味を持ちません。」(注:中略と下線は筆者による。)

本研究において「自己肯定感」を用いる理由は、古荘の自尊感情についての著書から、幼児の願いは自己肯定感の構成要素の一部にしかすぎないこと、また幼児の自己肯定感の形成は、自己意識の発達

過程からみれば萌芽期レベルに位置付けられるとともに、その内容を明確に分類したり分析したりすることが幼児期という発達段階からみて難しいのではないかと考えたからである。そのため幼児にとって願いや夢をもつことが自己肯定感の芽生えにつながるとの仮説に立って、調査研究を進めることとした。なお、幼児の願いの内容には、欲求・要望・欲望・願望・希望・夢などが想定されるが、これらは自己肯定感の一部に含まれると考え、本研究では包括的に「願い」の用語で表現することとした。

2.1.3 研究仮説と具体的な研究内容・方法

幼児と会話していると、「ゲームソフトを買ってほしい」「ケーキを食べたい」「プールに連れて行ってほしい」といった生活に直結した欲求に限らず、夢やあこがれなどの将来的な願望・希望等も聞かれる。例えば、「自転車に乗れるようになりたい」といった可能性への挑戦や、「電車の運転士さんになりたい」といった自分の将来像など、その子にとっての理由や背景とともに多種多様である。また園生活の中では様々な遊びの中で自分の願いやイメージどおりに展開したいという願い、一人ではできないダイナミックな遊びを友達と一緒にしたいという願いなども、毎日の遊びの中で絶えず心の中にもち続けている。

一方、七夕は日常生活における「ハレの日」として位置付けられ、七夕行事には子ども自身が自分の願いや夢と意識的に向き合うことができる保育的価値が内包していると考えられる。そこで、七夕行事と自己肯定感の芽生えとの関係性について次の(1)、(2)の研究仮説を設定した。

- (1) 保育に七夕行事を取り入れることは、幼児にとってよりよく生きるための願いをもつ特別な機会となり、自らの願いを意識することが自己肯定感の芽生えにつながるのではないかと。
- (2) 七夕行事は、周囲の友達とも互いの願いを認め合える機会であり、幼児が互いの自己肯定感を高め合いながら居心地のよい人間関係の中で過ごすことのできる役割を果たせるのではないかと。

保育者は幼児を保育する立場にあることから、自己肯定感の芽生えについての基礎的内容を理解した上で、七夕行事をはじめとした年中行事を保育内容へ反映させていくことや保育上の留意事項を認識しておく必要がある。研究仮説(1)、(2)を考察するに当たっては、自己肯定感に関する学問領域と保育領域をどのようにつないでいくかの問題意識をもって、保育者の立場から次のア～ウを具体的な研究内容・方法とした。

ア 自己肯定感のとらえ方については、保育者を目指す学生が大学での講義を通してどのように理解しているか、また現職者が研修用に活用している指導資料にはどのように記述されているかの観点から、授業用テキスト・現職研修用テキストを中心に文献調査を行う。数多くの書籍が発行されているが、本稿で取り上げた関係書籍等は、次のとおりである。心理学関係では、大学の授業用テキストとして『学びと教えるで育つ心理学—教育心理学入門—』⁴⁾、『新しい教育原理第2版』⁵⁾、専門書として『自己意識の発達心理学』⁶⁾、人権教育関係では、奈良県発行『人権にかかる保育マニュアル』⁷⁾、生徒指導関係では、文部科学省発行『生徒指導提要』⁸⁾、幼児教育関係では、『幼稚園教育要領解説』⁹⁾、『保育所保育指針解説書』¹⁰⁾、東京都教職員研修センター紀要第8～12号を選択した。

また、自己肯定感に関する実践研究の成果については、東京都教職員研修センターが先進的に取り組んできた「自尊感情や自己肯定感を高めるための教育」の内容や、同研究の指定推進園であっ

た東京都千代田区立九段幼稚園の研究内容について、それぞれ聞き取りや文献調査を行う。

イ 年中行事のうち子どもの成長や日々の生活の幸福追求に関する行事を選択し、民俗学の観点から文献調査を行う。子ども自身が自らの成長を願って参加する行事と、大人たちが子どもの成長を願う行事を対象とし、通過儀礼や農耕儀礼としての性格が強い行事については対象外とする。

年中行事については民俗学の研究成果を踏まえつつ、全国で一般的に行われている行事の中から奈良県内でも伝承されているものを検討事例として取り上げる。研究テーマに関連する年中行事としては、正月行事、小正月行事、節分行事、桃の節供行事、端午の節供行事、七夕行事が考えられるが、本研究テーマの趣旨に照らして七夕行事を中心に調べていく。しかし、社会の著しい変化によって伝承的な年中行事も都市化が進んだ地域ほど消滅または簡略化・形骸化してきているため、こうした年中行事の資料については、奈良県内の市町村史をはじめ『奈良県史第12巻民俗(上)』¹⁾に収録されている民俗調査の記録を手がかりとする。

ウ 研究仮説に基づく実践研究は、大和郡山市立平和幼稚園長の承諾を得た上で協力を依頼する。実践研究では、本稿の共同執筆者が七夕行事を生かした保育の指導モデルを作成し、5歳児ほし組担任に研究趣旨を説明した上で指導モデルに即した実践に取り組んでもらう。なお、指導モデルは、同園の行事計画及び5歳児年間指導計画を踏まえて作成する。

3. 研究内容の成果

3.1 文献調査から

3.1.1 研究内容アに関して、自己肯定感のとらえ方

① 心理学の関係では

大学の授業用テキストとして使用される『学びと教えて育つ心理学—教育心理学入門—』⁴⁾では、次の記述がみられ、基礎的理解を図っている。

〔社会的欲求の獲得〕の項では、マズローの欲求階層説を引用して「人は基本的な欲求が得られ、自身の情動や可能性を肯定的に考えることができるならば、その人は健康的に成長できるという考えである。」を紹介している。筆者は、年中行事との関係において「自身の情動や可能性を肯定的に考えること」に着目した。幼児が行事への参加を通して自分が願いをもって生きていることを肯定的に実感でき、自分の願いを周りからも共感的に受け止めてもらえる経験ができることから、保育者を目指す学生にはぜひ理解してほしい内容である。

『新しい教育原理第2版』⁵⁾には、乳幼児期からのアタッチメントに関する記述がみられ、幼児とアタッチメント対象者との関わりを通して「自分は守られ、大切にされる価値のある存在だという自己肯定感を育てていく」という先学の一文を引用紹介している。学生たちは、自己肯定感が人間の成長にとっていかに重要であるかについて授業の中で学んでいる。保育・教育職に就いてからも、年中行事には家庭や地域全体で乳幼児期からの子どもの成長を愛情深く見守っていく意味が込められていることの価値を再認識してほしい内容である。大学での授業を通して、年中行事と保育の関係を幼児のもつ願いの視点

あるいは自己肯定感の芽生えの視点から考えていくことについては、十分意味があるものと考えている。

また、自己肯定感については自己意識の発達との関係を理解しておくことが大切である。梶田叡一が著した『自己意識の発達心理学』⁶⁾の「第1章 自己意識の発達過程」の中で、「自己意識・自己概念のあり方を検討していく際の基本的枠組み」として「自己把握の主要様式」(P14)が示されている。その基本カテゴリーの中に「自己の可能性・志向性のイメージ」があり、さらに細分類された一つに「願望のイメージ」がみられる。具体例として「私は～したい、が欲しい」「私は～になりたい、でありたい」が挙げられている。筆者は、同書を通して自己意識を構成する一つとして自己肯定感が含まれ、幼児が対象であっても自己肯定感の芽生えと自己意識としての願望のイメージとの関係を結び付けてとらえることができると考える。しかし、その結び付きの具体的な把握方法については、幼児を対象とするだけに発達段階を踏まえれば非常に難しく、同書は筆者にとって理論面での理解を深めていく段階にとどまっている。

② 人権教育の関係では

人権を大切にする保育を推進する目的で奈良県児童福祉課が作成した『人権にかかる保育マニュアル』⁷⁾では、自尊感情に関して次のような記述がみられる。特に「自尊感情を育てる」の項では「自尊感情をもつということは、子ども自身が親や家族、周りの大人に愛されていると実感することからはじまります。」(P7)として、周囲から愛されていることを実感できる経験の大切さを述べている。

また、同書のコラムとして実践例「春を待つ集いから」の中で節分行事が取り上げられており、「現在では立春の豆まきにまつわる行事だけが伝えられており、人間のからだや心に潜む悪を鬼に見立て、それを排斥しようとするだけであったり、またときにはゲーム感覚で豆まきがされたりというようなこともあります。」(P22)とある。

時代の推移や社会の変化、人々の価値観の多様化とともに行事のもつ本来の性格が変質してきている現状を踏まえた際、「現在に伝えられている伝承文化の中には、本来伝えられなければならないことからはずれてしまっているものもあります。」(P22)という指摘に対して、保育者として真摯に向き合う必要がある。保育として取り入れられている年中行事には幼児の自己肯定感が芽生える教育的意義が含まれている場合があることを再認識した上で、まず保育者自身が年中行事に対する正しい知識をもつことが重要であると考え。そのためには民俗学の成果を保育の観点からまとめ、資料として保育者に情報発信していくことが求められるのではないだろうか。

③ 生徒指導の関係では

文部科学省発行の『生徒指導提要』⁸⁾では、次のような記述がみられる。同書は小学校段階から高等学校段階までの生徒指導の考え方や指導方法が主な内容であり、直接的には就学前の幼児を対象としたものではない。しかし、幼児期の子どもへの関わり方次第でその後の人格形成に大きな影響を及ぼすと考えた時、特に自己肯定感が芽生える幼児期の保育を担当する者や保護者にとっては理解しておくべき点がみられる。同書の「地域社会の教育力」の項では、子どもたちと地域社会との関わりの視点から、次のように述べられている。

「地域社会においては、近所のお祭り、子ども会や町内会等の行事、児童館・公民館活動、また、伝統的な文化活動や行事など、それぞれの地域特有の活動が行われています。児童生徒は、幼いときから

これらの行事や文化活動等に参加することで、地域の人々とのつながりを深めていきます。児童生徒は、こうした地域とのかかわりの中で社会性を身に付け、また、自分の役割を果たすことで自己有用感や自己肯定感を高めることができるのです。」（注:下線は筆者による。）

この一文は、幼児期の子どもが自分の願いをもつこととの関わりについて述べられたものではないが、行事への参加を有意義なものとして認識していることが読み取れる。大人主体で行われる行事に幼児期から参加させることが、自己肯定感の基盤となり、その後の生き方に少なからず影響を及ぼしていると考えられるのではないだろうか。保育に携わる者にも一読してほしい内容である。

④ 幼児教育の関係では

『幼稚園教育要領解説』⁹⁾では、自己肯定感や自尊感情という用語は表記されていないが、自己肯定感の育成に関しては肯定的なとらえ方で論述されている。例えば、[第2節 幼児期の特性と幼稚園教育の役割]の中で、発達特性として次のような記述がみられる。「幼児はいつでも適切な援助が受けられる、あるいは周囲から自分の存在を認められ、受け入れられているという安心感などを基盤にして、初めて自分の力で様々な活動に取り組むことができるのである。」(P13)

また、領域〈健康〉の内容の取扱いでは、次のような説明事項が記述されている。「幼児期において、心の安定を図る上で大切なことは、幼児一人一人が、教師や友達との温かい触れ合いの中で、興味や関心をもって積極的に周囲の環境とかかわり、自己の存在感や充実感を味わっていると感じられるとき、生き生きと行動し、自分の本心や自分らしさを素直に表現するようになり、その結果、意欲的な態度や活発な体の動きを身に付けていく。」(P81) さらに、領域〈人間関係〉の内容の取扱いでは、「集団の生活の中で、幼児が自己を発揮し、教師や他の幼児に認められる体験をし、自信をもって行動できるようにすること。」(P110)と述べられている。(注:下線は筆者による。) 願いをもつことの教育的意味や自己肯定感との関連についての直接的な言及はみられないが、特に「自信をもって」の文言に願いをもつこと、自己肯定感の芽生えとその育成が含まれていると考えられる。

平成30年度から施行される幼稚園新教育要領¹¹⁾において、その前文に次のようなこれからの幼稚園に求められることについての記述がみられる。その一部を抜粋して引用する。

「これからの幼稚園には、学校教育の始まりとして、こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の幼児が、将来、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにするための基礎を培うことが求められる。」(注:下線は筆者による。)

将来的な大人像を述べつつ、幼稚園教育として目の前の幼児に対して求められる教育について述べられており、第1章総則第2では「幼稚園教育において育みたい資質・能力及び『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』」として、(1)から(10)まで具体的に示されている。幼児の発達段階を踏まえば、画一的な指導を求めているとは考えにくいし、指標とした到達度評価に馴染むものでもない。筆者は方向目標としての遊びを通して成長していく幼児の姿が明確化されたものと考えている。本研究テーマである自己肯定感の芽生えに関連する姿としては、前述の10の具体的な姿のうちの(2)自立心での「自信をもって行動する」、(3)協同性での「充実感をもってやり遂げる」、(5)社会生活との関わりでの「自分が役

に立つ喜びを感じ」の文言が当てはまると考えられる。特に「自信」「充実感」「喜び」は毎日の遊びの中で幼児の願いが表出される姿としてとらえることができる。そして幼児自身が願いをもつ存在であること、友達もその子なりの願いをもっていることの意識強化につながる機会が七夕行事であるというのが、筆者らの考え方である。

『保育所保育指針解説書』¹⁰⁾では、自己肯定感の用語が表記されている。例えば同書の第1章総則の保育の方法に関して、「かけがえのない存在として、一人一人の子どもの主体性を尊重し、子どもの自己肯定感が育まれるよう対応していくことが重要です。」(P24)のように、主体性の尊重の視点から記述されている。(注:下線は筆者による。)また、第3章保育の内容の項では、情緒の安定のねらいについて次のように記述されている。その一部を抜粋して引用する。

「周囲の大人や子どもから、かけがえのない存在として受け止められ、認められ、自己を十分に発揮していくことは自分への自信につながります。保育士等が子どもを一個の主体として尊重し、主体として受け止め認めるという対応を通して、子どもは自己を肯定する心を育てていくのです。…(中略)…人との相互的な関わりにより育まれていくこうした自己肯定感を乳幼児期に育てることは、子どもの将来にわたる心の基盤を培うことでもあります。」(P62)(注:中略と下線は筆者による。)

同書では年中行事に関する直接的な記述はみられないが、保育士との関わりを中心に自己肯定感を育む重要性が述べられており、「周囲の大人や子どもから、かけがえのない存在として受け止められ、認められ、自己を十分に発揮していく」場面として七夕行事を位置付けることができる。幼児が行事に参加する体験を通して、自分が願いをもつことや願いごとが書かれた短冊を互いに認め合うなど、自己肯定感を育む上で効果的な活用ができると考える。

⑤ 道德教育の関係では

幼児期の子どもの自己肯定感の発達、小学校以降の道德性や社会性の育成とも深く関わりがみられる。小学校における道德教育とのつながりでは、『小学校学習指導要領解説道德編』¹²⁾において、道德の時間の目標に関して「道德的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深める」ために、次のように述べられている。「児童がよりよくなろうとする自分を感じ、自己を肯定的に受け止められるようにする。また、他者とのかかわりや身近な集団の中で自分の特徴などを知り、伸ばしたい自己を深く見つめられるようにする。それとともに、現在の生活及び将来の生き方の課題を考え、それを自己の生き方として実現していこうとする思いや願いを深めることができるようにする。」(注:下線は筆者による。)

幼児期の道德性の育成を図るための指導資料としては、2001年に文部科学省から『幼稚園における道德性の芽生えを培うための事例集』¹³⁾が発行されている。同書では、基本的な考え方として[第1章第1節 幼児期と道德性]の中で次のように述べられており、抜粋して引用する。

「道德性の発達のためには、特に、1) 他者と調和的な関係を保ち、自分なりの目標をもって、人間らしくよりよく生きていこうとする気持ち、2) 自他の欲求や感情、状況を受容的・共感的に理解する力、3) 自分の欲求や行動を自分で調整しつつ、共によりよい未来をつくっていこうとする力が必要である。その基盤を培う時期として、幼児期は大変重要な時期であるといえる。」(注:下線は筆者による。)

「自分なりの目標」や「自他の欲求」「自分の欲求」などの表現がみられるが、七夕行事を自己肯定感の育成との視点からとらえようと試みた本研究も、さらに幼児期の子どもの道德性と年中行事全体とい

う広いとらえ方から考察していく必要があると考える。

⑥ 現職研修の関係では

日々保育にあたる保育者は自己肯定感の育成に関してどのような研修を受けているのかについて、調査研究した。インターネット検索を通して、東京都が継続研究として取り組んだ事例が紀要としてまとめられていることがわかり、本研究の参考資料とした。東京都教職員研修センター（以下、「同研修センター」と表す。）では、5年間にわたる継続研究として「自尊感情や自己肯定感に関する研究」に取り組み、幼児・児童・生徒の自尊感情や自己肯定感を高める指導の在り方についてまとめている。本研究の特色は、対象に幼児期の子どもが含まれていることである。第8号紀要¹⁴⁾では基礎研究としてローゼンバーグら先学の研究成果に学びつつ、研究1年次では自尊感情について次のようなとらえ方をしている。

「本研究では、自尊感情を自分の否定的な面を受容するとともに、前向きに取り組み、様々な影響の中で自分を見失わず、可能性を信じて行動できる幼児・児童・生徒の育成を目指し、『自分をかけがえない存在だと思う気持ち』をとらえた。」(P7)

筆者が着目した点は、同研究の中で前述した梶田が提唱する自己概念の形成のうちの一つ「自己の可能性・志向性のイメージ」との関係である。同紀要では、梶田理論から「自己概念を形成するために教育が志向すべき目標」の一つとして「自分自身のはらむ可能性について、基本的にはどこまでも開かれたものであるという実感を持ち、そういった可能性を現実化するために、機会を探し、試みをおこない、努力する、という姿勢を持つようになること（自己の可能性への信頼と実現への志向）」(P9)を挙げている。そして、指導・援助の留意点として五つの観点を設定して研究が進められた。そのうちの一つ「自分の可能性」については、次のように述べている。「自分の行動の達成感を感じるとともに、失敗や困難は自分一人だけではないという安心感をもち、努力すればできるという自分への可能性をもつ。」(P10)

同研修センターが自尊感情の評価について研究を深めていった4年次の紀要第11号¹⁵⁾では、東京都としての自尊感情と自己肯定感の定義をそれぞれ明らかにしている。そのうち自己肯定感については「自分に対する評価を行う際に、自分のよさを肯定的に認める感情」と表現している。もっとも自尊感情であれ自己肯定感であれ、教育の目的が達成されるためには、幼児期から学齢期以降の子どもまでの継続性・計画性・一貫性を尊重した取組が重要となる。本稿で取り上げている幼児の七夕行事への参加体験も、自己肯定感との関係からみれば幼児の願いという限定的な視点でのとらえ方であることを十分認識した上で、研究仮説に対する考察を進めたい。

同研修センターの『自尊感情や自己肯定感に関する研究』についての理解を深めるため、平成28年6月20日に同研修センターと研究の指定推進園であった千代田区立九段幼稚園を訪問し、それぞれ詳しく説明を聞かせてもらうことができた。以下に記述する内容は、説明内容や提供を受けた研究紀要等の資料をもとに筆者の責任において理解したことがらをまとめたものである。

同研修センターでは、自尊感情の傾向を把握するための自己評価・他者評価のシートを開発している。評価研究に関して都内のある幼稚園長の話として次のような事例が紹介された。「最近の子どもたちの気になる姿として、遊びの中で一度失敗すると手を出さなくなったり、初めての遊びに尻込みしたり、

友達に暴言をはいたりする子がいる。」また、筆者が子どもの願いと七夕行事との関連を研究テーマにしているという話を受けて、「子どもの将来や可能性に関しては、子どもが自らの願いとしてもつことを期待しているが、なかには親の願いが子どもの心に投影され、親の価値観が優先している場合もみられる。」との助言をいただいた。

これらの話を七夕行事での願いに引き寄せて考えれば、幼児は自己認識が十分に発達していない中で、どの子も自分の願いをもち、それを素直に自己表現できているとは限らないということであろう。その背景として、一部の幼児の願いの中には親の願いや期待を敏感に感じ取り、そのまま自分の願いとして受け入れ、結果として親子が理想の将来像を共有しているかもしれない可能性があるということになる。幼児がもつ願いの把握方法については、質問紙調査ではなく保育の中で保育者が丹念に対話を通して聞き取っていく方法に頼らざるを得ない。筆者らの研究での実践に当たっては、親の価値観が幼児の心理に反映されている要素を排除できないことにも留意していくべきであるとの貴重な示唆をいただいた。

同研修センターの研究から、自尊感情が育成されるためには他者とのかかわりの中でとらえることが重要であることがわかり、指導主事からも「愛される経験、ほめられる経験、認められる経験、感謝される経験」を保育の中で大切にしていくことの必要性が言及された。これらのことから、本研究を進めるに当たっては個々の幼児の願いだけに焦点化するのではなく、日々の保育の中で幼児が互いの存在を認め合っていく関係性を育てていくことにも留意して実践を進めていく必要があることを再確認できた。

⑦ 先進的研究実践園の関係では

千代田区立九段幼稚園では、「一人一人の自尊感情や自己肯定感を高める指導の工夫」に取り組んでいる。訪問時に当園の「平成28年度指導計画」¹⁶⁾と「他者評価シート」¹⁷⁾を資料として提供していただいた。指導計画では3歳児から5歳児までそれぞれⅠ期からⅣ期に分けて、「発達の姿、ねらい、指導内容、自尊感情や自己肯定感の高まりにつながる幼児の姿と配慮点、環境の構成、教師の援助」の項目立てによって記述されている。特に「自尊感情や自己肯定感の高まりにつながる幼児の姿と配慮点」では、同研修センターの研究成果を踏まえ、「A 自己評価・自己受容、B 関係の中での自己、C 自己主張・自己決定」の観点を設定して記述されている。それぞれの観点を高めるポイントとして、4歳児では次のように示されている。Aの観点では「自分のよさを実感し、自分を肯定的に認めることができるようにします。」、Bの観点では「多様な人とのかかわりを通して、自分が周りの人の役に立っていることや周りの人の存在の大切さに気付くようにします。」、Cの観点では「今の自分を受け止め、自分の可能性について気付くようにします。」幼児が願いをもつことについては「自分への可能性」と関連していると考えられることから、当園の視点では「C 自己主張・自己決定」に含まれることになる。

一方、当園の他者評価シートでは22項目が設定されており、その中の1項目には「あなたは自分のことは自分で決めたいと思いますか。」として、「自分のしたいこと、行きたいところなど、自分の思いをもち、はっきり話したり、答えたりする。」と、具体的な内容が書かれている。当園の先進的な研究の取組は、「一人一人の自尊感情や自己肯定感を高める指導の工夫」がテーマであり、七夕行事との関連に焦点を当てたものではないが、「目標に向かって取り組もうとする気持ちもてる」、「自分のしたいこと、行きたいところなど、自分の思いをもち」などは、幼児が願いをもったり自分への可能性を自覚したりすることにつながっていることを強く感じた。

3.1.2 研究内容イに関して、民俗学の観点から選択した年中行事

本研究で取り上げる年中行事は、前述したとおり、主として幼児自身が自分の健康や成長、技能の上達などの願いを自覚できるもの、周囲の大人が成長を願ってくれていることを認識できる行為が含まれているものを検討対象とした。筆者が平成27年に奈良県国公立幼稚園・こども園の実態調査（本学紀要第46号参照）で挙げた年中行事の中から、小正月行事のトンド、節分行事の豆まき、七夕行事の短冊飾りを選択した。これら三つの行事には本研究テーマにつながる要素が含まれており、園によっては様々な工夫を凝らしながら保育を行っており、保育からみた教育的意義は大きいと考えられる。また行事体験も幼児にとって心に残る印象度が高いと判断したためである。ただし、トンドについては現在も園行事として行っている例は極めて少ない現状にあり、残念ながら本稿で検討していく価値は低い。

『奈良県史第12巻民俗(上)』¹⁸⁾には、前述した三つの年中行事についての県内各地の調査記録が掲載されている。県内各地で伝承されてきた行事には由来や行為等に高い類似性がみられるものの、現在では行われていないものも多い。同書の「第5章 暮らしのリズム」では県内でみられた季節の行事の様子が報告されており、その中から子どもの健やかな成長や技術の上達など、行事に込められている本来の人々の願いに着目し、トンド、節分の豆まき、七夕の笹飾りについての記述を調べた。その一部を引用して紹介する。(注:下線は筆者による。)

〈トンド〉

「平坦部では、中和の地方に大きなトンドが見られ、北葛城郡広陵町の赤部あたりでは、トンド場に大トンドを組み、十四日の夜、アキの方角から火をつけ、『天筆和合楽、地福円満楽、新玉の年の始めに筆とりて、よろずの宝書きぞおさめる』と書いた紙を火に上げると字が上手になるという。書初めを上げる風は全般的に見られるし、この火で焼いた餅を食うと歯が痛くならないという。」(P422)

〈節分〉

「奈良市の東山中の地域では、氏神さんでほかの人の供えた豆をたばり、その拝殿や舞台で『福は内、鬼は外』と唱えて豆を撒く。豆を掴むとき、うまく自分の年の数だけ掴めば吉兆だという。詣ったものはそこで年の数より一粒余計に食べて年をとる。下狭川では他人の供えた豆をたばって食べることによってマメ(丈夫)になるという。たばった豆は家に持ち帰り、家内中で分けてそれぞれ年より一つ余計に食べて年をとらせる。」(P433) (筆者注:「たばる」は奈良の方言として神仏に供えた物を下げる行為を意味する。)

〈七夕〉

「天理市では旧暦七月と新暦八月の所があり、六日の朝、新竹に五色の短冊を吊り、カドに立てて夜、西瓜にまくわ瓜、ほうずきを供えて七夕さんをまつ。子供らは硯石筆墨に算盤を供え、また男児は草刈が上手になるようにと鎌を、女兒は機織が上手になるようにとひ(梭)を供え、裁縫が上手になるようにと針道具を供えた。」(P462) (筆者注:「梭」は、機織りに使う際に横糸を縦糸の間に通すための舟形をした用具のことである。「杼」と表される場合が多い。)

トンド、節分での願いごとでは、内容の同質性や共通性が高いままに今日まで伝承されている例が多くみられるが、七夕の短冊に書かれた願いごとは、子どもにとって大人から教わった伝承的な行為を模倣しているものの、今日では自分自身の願いごとをする行事として受け止めているのが一般的である。

3.2 指導モデルの作成

本研究では、七夕行事を保育に位置付けた指導モデルを作成し、研究仮説(1)、(2)に即して保育を实践することとした。前述したとおり、健康や成長への願いや日々の生活への感謝などが込められた年中行事の中でも、七夕行事には個人の願いが最も顕著な形で反映されており、自己肯定感の芽生えを個別的に読み取りやすい。また、願いごとを通してその子なりの内面が個性として表出される行事であると考えたためである。

本稿の共同執筆者が自己肯定感が芽生えるための保育内容と方法を盛り込んだ七夕行事を中心とした指導案を作成し、研究協力者である5歳児ほし組担任に実際の保育を行ってもらい、その成果と課題を検証することとした。その際、担任には保育の中で幼児の願いについて個々に対話をしながら聞き取ってもらい、後日にその記録とともに日常の保育記録も参考にしながら、願いの内容分析を行った。学級人数が11名(男子4名、女子7名)という少人数であることから、数値的な分析は行わないこととした。

3.3 保育実践の分析・検証

本研究では、指導モデルとして週案(図1)、日案(図2)及び5歳児指導計画Ⅱ期(付図1)、5歳児ほし組期間案[6月19日～7月19日](付図2)を作成したが、付図1及び付図2は大和郡山市立平和幼稚園で作成されている指導計画Ⅱ期や期間案をもとに、七夕行事関連を太字で明示したものである。

図1の週案では、ねらいとして週前半に「七夕の飾りに興味をもって、好きな飾りを作ることを楽しむ。」、週後半に「七夕に思いを馳せながら、友達といろいろな笹飾りを作ることを楽しむ。」と設定した。活動では、飾りを作ったり歌を歌ったり絵本を読んでもらったりするとともに、配慮として短冊にどのような願いごとを書きたいのかについて、担任だけでなく子ども同士でも十分に会話を楽しむことができるように時間を多く取る計画を立てた。そのための中心的な援助として次の4点を考えた。

- ア 好きな飾りが自由に作れるよう、材料を用意しておく。
- イ 友達と工夫したり教え合ったりしながら、いろいろな笹飾りを作っている様子を見守る。
- ウ 七夕に向けて思いを描いている一人一人の願いをしっかりと受け止める。
- エ 子どもたちと共に笹に飾りをつけ、七夕に思いを馳せられるような言葉を掛ける。

図2の日案に示した七夕前日の7月6日には、登園後いろいろな遊びを楽しんだ後、自分の願いを思い浮かべ、短冊に願いごとや夢を文字や絵でかく活動、短冊を友達同士で互いに紹介し合う活動、みんなで笹にいろいろな飾りを吊る活動を中心に計画した。特に短冊にかく場面では願いごとを考える時間を十分に確保し、一人一人が自らの願いや夢を話せるような雰囲気づくりに努めた。また、担任は一人一人の願いごとや夢の背景や理由などについても子どもとの対話を通してしっかりと受け止め、「願いが叶うといいね」といった肯定的な気持ちや共感的な態度をもって接していった。

表1は、ほし組の子どもたちが短冊にかいた願いごとと、その理由や背景について担任が聞き取ったものを一覧にしたものである。(筆者注:願いごとは読みやすさに配慮して一部をカタカナや漢字に変換した。)

表1 ほし組の子どもたちの願いごととその理由や背景

幼児	性別	短冊に書いた願いごと	願いごとの理由や背景（子どもたちとの会話から）
A	男	自転車をもっとうまくなりたい	自転車に乗れるようになったことが嬉しく、もっと上手になっていろいろな所に行きたいから。
B	男	大きくなりたい	大きくなったら何でもできるようになると思うから。
C	女	ケーキ屋さんになれますように	キャラメルケーキを作ってみんなが喜んでくれたら嬉しいから。
D	女	おもちをいっぱい食べられますように	Dは、おもちが好きだからおもちをいっぱい食べたいという願いをもっている。
E	女	自転車をがんばりたい	自転車で坂を立って乗りたいという願いをもっている。
F	女	もぐ君とびー君が死にませんように、 私たちも元気に遊べますように	もぐ君とびー君は子どもたちが世話をしているウサギで、もしいなくなったら寂しいし、みんなでいっぱい遊びたいからと思っている活動的なFである。
G	男	満月のうさぎのおもちを食べてみたい パパの会社のトラックに乗りたい	おもちについては、どんな味がするのか食べてみたいと、興味から生まれた願いである。 トラックに乗りたいことについては、普段からかっこいいし、父親の仕事が大変だから手伝いたいと言っている心優しいGである。
H	女	ケーキ屋さんになれますように	ケーキは美味しいし、いっぱい食べたい。作るのも好きというHである。
I	男	お星様が大きく見えますように	ずっと考え込んでいたIであったが、お星様はきらきらしているけど、今は雨ばかりで、きれいな星が見えないから。
J	女	アイスクリーム屋さんになれますように	アイスクリームをいっぱい食べられるからなりたい。
K	女	もぐ君とびー君が死にませんように、 私たちも死にませんように	みんなが死んでしまったら悲しいから。

短冊に書かれた願いは、内容的には「自転車をもっとうまくなりたい」「ケーキ屋さんになれますように」のような人間的成長を願うことや将来の夢が半数みられる。また、幼稚園で飼育しているウサギに対する愛情など、自分の健康や周囲の仲間のことを意識した願いごとみられる。なかには「満月のうさぎのおもち」や「お星様」など、幼児期の子ども特有の心の世界が表出された願いごとみられる。幼児は、担任や学級の友達との日常生活での会話の中で自分の願いや夢を話しているが、担任の保育記録では短冊に書かれた願いごとと普段話している願いが必ずしも一致していない。一致がみられたのは「自転車に上手に乗れるようになりたい」「ケーキ屋さんになりたい」「アイスクリーム屋さんになりたい」「パパの会社のトラックに乗りたい」であった。

幼児期の子どもにとって願いが一致していないのはむしろ当然のことであり、幼児期の子どもという

のはまさに今を真剣に生きている存在であると強く感じる。また「大きくなりたい」と書いた子は、大きくなったら何でもできるというのが理由であり、まさに万能感に溢れている幼児期ならではの大人になることへの期待感がうかがえる。願いをもったり夢を語ったり、みんなと話し合ったりすることが、今の自分を肯定的に受け止め、自己肯定感の芽生えにつながっていると推察できる。七夕行事だけでなく日常の保育の中でも夢を話すこと自体を楽しむことができる場面をもっと多く設定することによって、幼児は自己肯定感だけでなく他者を理解する力や共感する力が育っていくのではないかと考えられる。

保育に取り入れた七夕行事の願いでは、幼児が日常の遊びの中でもつ願いとは異なり、夢が叶ってほしいという次元でとらえている傾向がみられる。幼児は七夕にちなんだ話をすでに聞いているということも考えられるが、七夕という特別な日に行われる行事環境が、幼児にとっての願いがイコール将来の夢という意識をもたせているのではないだろうか。これらのことから七夕行事は、自分が願いをもっている存在であることや友達も同じように願いをもっているということを意識できる最もふさわしい行事であると考えられる。

担任は、幼児が願いごとを書いている場面で話しかけたり、願いごとの背景やなぜそのような願いをもっているかを中心に話を聞いたりした。担任の保育記録から特に自己肯定感の芽生えが感じられる3名(表中のA児、C児、G児)を抽出し、普段の会話や願いごとを書いている場面、発表する場面での様子を掲載する。(注：下線は筆者らによる。)

〈A児(男)〉

考えてきた願いごとを書き始める。わからない文字は担任に聞きながら書いていく。A児は、進級当初は照れて自分の思いをまわりに出せずにいたが、自転車に乗れたことが嬉しくて、それをきっかけに担任と話をするようになった。日頃からあまり多くは話さないA児であるが、自分の思っていることを言えるようになってきている。

A児の書いた短冊への願いごと・・・『自転車をもっとうまくなりたい』

T「素敵なお願いごとを考えだね。」

A「うん。」

T「自転車に乗れるようになったのが嬉しかったって言ってたね。A君、もっと上手になりたいの？」

A「だって…。もっと、いっぱい乗れるようになっていرونなどこへ行きたい。」と、笑顔で答える。

A児は自転車に乗れるようになったことが嬉しくて、その嬉しい思いが今もずっと続いている様子が見えうかがえる。学級みんなの前で自分の願いごとを発表した時も、笑顔で自分の思った願いごとを話すことができ、担任として話を聞きながら自己表現に関するA児の成長ぶりを実感できた。

〈C児(女)〉

C児は自分の思いをすらすらと書き始める。普段の会話でもケーキ屋さんのことが多く、将来の夢も変わらずにモチ続けていることがわかる。

C児の書いた短冊への願いごと・・・『ケーキ屋さんになれますように』

T「Cちゃんはケーキ屋さんになりたいんだね。いつも言っているよね。」

C「だってケーキを作るのが楽しいし、いろいろなケーキを作ってみんなに食べてほしいから。キャ

ラメルケーキも作りたい。」

T「何でキャラメルケーキを作りたいの？」

C「キャラメルケーキは美味しそうで、みんなが喜んでくれたら嬉しいから。」

T「Cちゃんのケーキ屋さんの夢には、みんなが喜んでくれたら嬉しいことまで考えているんだね。」

C「うん。」と、嬉しそうに頷く。

C児は自分の思いを確かにもっているが、誰かが喜んでくれると嬉しい、誰かのために何かをしたいという思いも強くもっていることに驚いた。他人の喜ぶ顔を意識できることは、5歳児がもつ心情としてずいぶん成長していることがうかがえ、担任としても嬉しいかぎりである。

〈G児（男）〉

G「先生、うさぎって、どうやって書くの？書いて。」と尋ねるので、別の短冊に見本を書いた。

G児の書いた短冊への願いごと・・・『満月のうさぎのおもちを食べてみたい』

楽しい願いごとだと感じたので、G児にその理由を尋ねると「月にいるウサギがついているおもちが、どんな味かなと思って…。」と、にこにこしながら話してくれた。担任にとっても子どもの夢の世界を共有できた時間となり、子どもらしい面白いことを考えたなと思った。

T「G君、前にも話していた、お父さんの会社を手伝いたいって言っていたことは、書かなくていいのかな。」

以前よりG児が父親の仕事について憧れや手伝いたいとの思いをもっていたことを思い出し、そのことをG児に尋ねてみた。

G「それも思ってるけど、二つになるし…。」

T「決められなかったら、二つあってもいいと思うよ。」

担任としてG児の気持ちを大事にしたいと思った。

G「そのことも書きたいから、先生書いて！」と言ったので、G児に「何で書きたいの。」と尋ねながら鉛筆で薄くひらがなを書いてあげた。G児はサインペンで上から下書きした字をなぞっていた。

G児の書いた二つ目の短冊への願いごと・・・『パパの会社のトラックに乗りたい』

担任が先に言ったことでG児が父の仕事のことを思い出したのかどうかは定かではない。また、みんなが一つしか願いごとを書いていないことから躊躇する様子もみられた。記録をまとめながら、担任としてあの時G児に言ったことがよかったのかどうかはわからないが、満足感に浸りながら二つ目の願いごとを書いていた姿から、結果としてG児に父親の仕事の話に向けたことがよかったのかなと思う。その後もG児の書いた願いごとがみんなの注目を集め、話が広がっていった。願いごとが二つあることに他の子どもたちは「二つもあるの？」「何？何？」と興味をもったようであった。

G児が願いごとを話すと、何人かの子どもたちは「G君のパパ、トラックに乗ってるからな。」と、どんと会話弾んでいった。

G「そうやで。大変やし、手伝いたいねん。」

「リフトもあるねんで。」と自慢気に話すG児は、普段から父親の仕事について見たり聞いたりして憧れの気持ちをもっていることや、忙しそうにしている父親の姿に気付いていたからこそ手伝いたいと

願っている様子が感じられた。また、「トラックに乗ってるの知ってる。」と話す周りの子どもたちの様子からも、友達同士の会話の中にG児の父親の仕事が話題になっているのだろうと感じた。

G「運ぶ重たい物あったら言ってな。Gが運んであげるから。」と、嬉しそうにしていた。

T「G君の願いごとが二つとも叶うといいね。」

学級全体で願いごとを発表した時にも、G児の嬉しそうに話す姿があった。

担任による3名の幼児との会話記録や思いを読んで、幼児が自分の願いごとを言葉として表出することによって心の内を十分理解でき、その子なりの自己肯定感が育まれていることを強く感じるができる。一般的に多感な時期の子どもであれば、素直に自分の夢や願いを外に出すことにためらいや恥ずかしさが生まれる。だからこそ、幼児期にふさわしい自己肯定感の芽生えの機会として、七夕行事を保育の計画に位置付けていきたいと考える。11名の幼児の願いごとは様々であるが、短冊にかいた絵やひらがなを互に見せ合ったり話し合ったり、笹に飾られた短冊をみんなで眺めたりする七夕行事には、自分だけでなく友達も同様にそれぞれの願いをもっていることに気付き、願いの内容を通して互のよさを認め合える人間関係を構築していくことが十分にできると考えられる。



図3 ほし組の子どもたちの活動の様子（平成29年7月筆者撮影）

図3の写真については、担任を通じて幼児の保護者から本稿への掲載許可をいただいている。3枚の写真は、友達と話をしながら自分の願いごとを書いている場面、自分の願いごとを学級みんなに聞いてもらっている場面、短冊に書いた自分の願いごとを互に見せ合いながらおしゃべりを楽しんでいる場面である。

七夕行事として短冊に願いごとを書く活動を単に笹飾りの一つとして終わるのではなく、幼児期の子どもの自己肯定感など内面を育むための営みとしてとらえることが大切であると考えられる。

6月下旬～7月3日(月)		4日(火)
ねらい	・七夕の飾りに興味をもって、好きな飾りを作ることを楽しむ。	
	○それぞれの飾りの意味や美しさを感じながら作ることを喜ぶ。	○貝殻つなぎの意味や美しさを感じながら作ることを楽しむ。
幼児の活動	○七夕についての話を聞く。 ○輪飾りを作る。 ○星つなぎ、三角つなぎ、四角つなぎ、丸つなぎのうち二つを作る。	・好きな飾りを作り、笹に吊す。 (輪飾り、三角つなぎ、四角つなぎ、星つなぎ、天の川、ちょうちんなど) ○貝殻つなぎを作る。
援助及び環境の構成	・七夕に興味もてるような絵本や笹飾りなどを展示しておく。 ・七夕が近づくにつれ少しずつ星空に興味もてるような言葉掛けをしていく。 ○作り方や目安となる長さをわかりやすく説明する。 ○輪つなぎや三角つなぎ、四角つなぎを飾る意味を伝え、自分の思いをもって作ることを楽しめるように言葉掛けをする。	・飾りが自由に作れるよう、材料を用意しておく。 ・子どもたちが興味をもつような見本の飾りを作って展示しておく。 ・子どもたちと共に笹に飾りを吊し、七夕に思いを馳せられるような言葉を掛ける。 ○作り方を説明し、目安となる個数を伝える。 ○貝殻つなぎを飾る意味を話し、期待感をもって楽しみながら作るように言葉掛けをする。また、貝殻つなぎの美しさを共に味わう。
絵本	たなばた 七つの星	たなばたプールびらき
歌	たなばたさま きらきら星	

5日(水)		6日	7日(金)
・七夕に思いを馳せながら、友達といろいろな笹飾りを作ることを楽しむ。			
ねらい	○織り姫と彦星のことをイメージしながら作ることを楽しむ。 ○友達の思いを聞いたり、自分の願いごとを思い描いたりする楽しさを感じる。	6日(木)は別紙	○笹飾りを見たり、歌を歌ったりしながら、友達と一緒に七夕に思いを馳せることを楽しむ。 ○みんなでクラスの願いごとについて話し合い、クラスの友達のことを思いやる気持ちをもつ。
幼児の活動	・好きな飾りを作り、笹に吊す。 (輪飾り、三角つなぎ、四角つなぎ、星つなぎ、天の川、ちょうちん、貝殻など) ・短冊に願いごとを自由に書く。 ○織り姫と彦星を作る。 ○明日、短冊に書く願いごとについての話し合いをする。		・飾りを作ったり短冊に書いたりして、笹に飾る。 (輪飾り、三角つなぎ、四角つなぎ、星つなぎ、天の川、ちょうちん、貝殻、織り姫、彦星、短冊など) ○クラスの願いごとを話し合い、短冊に書く。 ○みんなで、クラスの願いごとを笹に吊し、「たなばたさま」の歌を歌う。
援助及び環境の構成	・好きな飾りが自由に作れるよう、材料を用意しておく。 ・友達と工夫したり教え合ったりしながら、いろいろな笹飾りを作っている様子を見守る。 ・七夕に向けて思いを描いている一人一人の願いをしっかり受け止める。 ・子どもたちと共に笹に飾りをつけ、七夕に思いを馳せられるような言葉を掛ける。		○クラスのことを思いながら意見を出している子どもを認める。 ○それぞれの思いを受け止めるとともに、誰もが納得してクラスの願いごとを決められるようにする。 ○笹飾りをみんなで眺め、今夜の七夕の星空を楽しむにでき、七夕に思いを馳せるように言葉を掛ける。 ○それぞれの願いごとが叶うようにと、みんなで声を掛けようと呼びかける。
絵本	10ぴきのかえるのたなばたまつり		たなばたバス
歌	たなばたさま きらきら星		

図1 週案

平成29年7月6日(木) 5歳児 ほし組 指導案		
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ目的をもつ友達と一緒に遊びを進める楽しさを味わう。 ○自分の願いごとを短冊に書いたり、友達の願いごとを聞いたりしながら、友達と一緒に夢を思い描いたり、七夕に思いを馳せたりすることを喜ぶ。 ○友達と一緒に笹に飾りを吊し、笹飾りの美しさを味わう。 	
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と一緒に好きな遊びを進める。 ○自分の願いごとを喜んで短冊に書いたり、友達の願いごとを楽しんで聞いたりする。 ○友達と一緒に笹にいろいろな飾りを吊す。 	
時間	予想される子どもの活動	教師の援助及び環境の構成
8:50	<ul style="list-style-type: none"> ○いろいろな遊びをする。 ・水遊びをする。 ・砂場遊びをする。 ・好きな飾りを作り、笹に飾る。 ・願いごとを書いて笹に飾る。 <p style="text-align: right;">など</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自ら選んだ遊びがじっくり楽しめるような時間や空間を確保する。 ・好きな飾りが自由に作れるよう、材料を用意しておく。(折り紙、画用紙、千代紙、金銀紙、こよりなど) ・これまでに作った飾りや、子どもが作ってみたいと興味をもつような飾りを保育室に展示しておく。(天の川、ちょうちん、星など) ・友達と工夫したり教え合ったりしながら、いろいろな笹飾りを作っている様子を見守る。 ・七夕行事への思いを描いている子どもたちの願いをしっかりと受け止める。 ・作った飾りを笹に吊したいという子どもたちのために、ゲームボックスやセロテープを笹の近くに準備し、自由に吊せるようにしておく。また、教師も共に吊しに行き、七夕に思いを馳せられるような言葉を掛ける。
10:00	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の願いごとを短冊に書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・字の書けない子どもには、教師が書いたり、絵で描いてもよいことを伝えたりする。 ・サインペンを準備する。 ・できるようになりたいこと、やってみたいこと、また、なりたい自分、将来の夢などを会話しながら尋ね、将来の自分を思い描くことを楽しめるよう導いていく。 ・自分の願いを考え、表すことで、自分について考えたり振り返ったりしている子どもの思いに寄り添う。 ・それぞれが自分の願いを思い浮かべながら、楽しく書いている姿を見守る。 ・それぞれの願いごとを肯定的に温かく受け止め、天に願いが届くことを子どもたちと共に願うようにする。 ・それぞれの願いごとを発表し合うことで、友達の願いごとにも興味をもち、互いに認め合える機会となるようにする。また、みんなの願いが天に届き、願いが叶うことを思い合えるような気持ちをもてるように声を掛ける。
10:40	<ul style="list-style-type: none"> ○クラスのみんなと一緒に笹に飾りを吊す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大きな笹にそれぞれの飾りを吊し、素敵な七夕の笹飾りができたことをみんなで喜び合えるようにする。 ・みんなで笹を眺め、笹飾りの風に揺れる音を楽しんだり、笹飾りの美しさを味わったりする時間を確保する。 ・明日の七夕への気持ちを高めたり、みんなで七夕に思いを馳せたりできるような言葉を掛けたりする。 ・笹の周りに集まって歌う。七夕の世界をイメージしながら、天に声を届けるような気持ちで歌えるよう声を掛ける。
11:15	<ul style="list-style-type: none"> ○絵本『たなばたこびとのおはなし』を見る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・七夕への興味・関心がさらに広がるように読み進める。
11:40	<ul style="list-style-type: none"> ○降園する。 	

図2 日案

4. 考察（仮説の検証）

4.1 仮説（1）について

「保育に七夕行事を取り入れることは、幼児にとってよりよく生きるための願いをもつ特別な機会となり、自らの願いを意識することが自己肯定感の芽生えにつながるのではないか。」については、複数の年中行事の調査研究を進めていく中で自己肯定感が芽生える行事として七夕が最も有効性が期待できることがわかり、実践では七夕行事に対象を絞った。七夕を自分の願いについて自覚できる行事として、また自己肯定感が芽生える行事として意味付け、保育の中に適切に位置付けていく重要性和、七夕行事のもつ保育的価値の再認識の必要性について考察する。

七夕行事と自己肯定感との関わりを考察するに当たっては、七夕行事に関して『奈良市史民俗編』¹⁹⁾の記述を参考にして次のように考えた。

七夕行事については、我が国では古くから短冊に願いごとを書いて飾りと共に笹に飾る行事としてとらえられている。同書の〈タナバタ〉の項では、次のように説明されている。「今は八月の行事となっているが、もともとお盆と同じく旧暦の七月の行事である。牽牛・織女の出会いに因んで、古くから星祭として知られ、芋の葉の露で墨をすり、『七夕様』とか『天の川』とか星祭に因んだ文句を短冊や色紙に書いて笹竹に吊し、季節の野菜を供え、子供の技芸の上達を祈り、あとは川へ流すのが本市域でもごく普通のならわしである。」(P218-219)

前述した天理市の事例では、硯石、筆墨に算盤、鋏、お針道具などに象徴される願いごとは、聞き取り調査当時の時代を反映させており、しかも大人になってから困ることのないようにと、生活に直結した技術に対する願いを親子共々共有しながら飾り付けを行っていることがわかる。七夕行事は、子どもにとって自分が周囲から大切にされていることを実感できる機会となってきた。短冊に願いごとを書く行為そのものが現代においても受け継がれており、願いごとが時代を反映した内容に変化していても、現在と将来にわたってよりよく生きていきたいという願いの本質においては同じと考えてよいのではないだろうか。

仮説（1）に対する考察として、七夕行事を幼児の自己肯定感の芽生えとの関係でみれば、自分の将来への可能性や夢を叶えたいという願いと深く関わっている。実践を通して、七夕行事は幼児自身に願いをもつことを自覚させ自己肯定感を育むことのできる可能性と期待性の高い保育内容であると言える。ただこの考えの根拠は幼児の姿を通した筆者らの印象であり主観的な判断にとどまっている。心理学については全くの門外漢である筆者としては、現段階では願いをもつことの自覚と自己肯定感を育むこととの関係性について学問的に論及できておらず、また今回の幼稚園での試行的実践からも客観的に証明するまでには至っていない。

筆者が担当した平成28年度の「教育学概論」の授業では、教育の意義や使命等をテーマに「きょう育」の「きょう」に当て字を入れ、その漢字の意味を考えながら自分なりの教育論を書く活動を設定した。多くの学生は「共」「協」「響」「競」の漢字を選択したが、一人の学生S.Iが「叶」を選択していた。その意味付けについて次のように記述しており、本稿のテーマとの関わりがみられることから紹介したい。なお、学生には本稿への引用・掲載の了解を得ている。

「私は叶育という字にしました。理由は、子どもにとっての初めての学びであり、これからの夢を叶えるためにも大事な時期だからです。子どもたちは夢を叶えるためにもコツコツと勉強や遊びを通じて学びます。

子どもの中でも、それぞれいろいろな夢があります。例えば、『プロ野球選手になりたい』や『パン屋さんになりたい』や『ドラえもんになりたい』など、その子その子の個性が子どもの頃にはとても出ると思います。保育士になった時に、夢を叶えるための通過点として子どもの頃に夢をもたせてあげるのも仕事だと感じました。夢をもたせてあげるためには、たくさん考えさせてイメージをもたせてあげると、将来の自分について少しはイメージができるかと思います。子どもだから考えさせずに手伝ってあげてばかりでは、子どもの叶育も全くできないと思うので、子どもなりに考えさせて、それで間違っていたら直してあげるなど、将来の夢に近づく叶育が必要だと感じました。」

(注：下線は筆者による。)

この文を書いた学生は、保育の場を「夢を叶えるための通過点」と位置付けて、子どもと関わる姿勢について「子どもの頃に夢をもたせてあげる」と、自分なりに意味付けした考えを述べている。周囲の大人から押し付けられた期待ではなく、「将来の夢に近づく叶育」として自らの願いを夢としてじっくりと時間をかけてもたせることの重要性を指摘している一文であると、筆者は評価している。

4.2 仮説(2)について

「七夕行事は、周囲の友達とも互いの願いを認め合える機会であり、幼児が互いの自己肯定感を高め合いながら居心地のよい人間関係の中で過ごすことのできる役割を果たせるのではないか。」については、5歳児ほし組の保育実践を通して検証した。

今回の実践を検証するに当たって大きな役割を果たしたのが、担任の幼児一人一人に対する愛情と保育記録である。特に日常の遊びの中で一人一人の様子や会話を記録していくことで、七夕の願いごとを書く活動もその場限りのもので終わらなかった。その一例が「パパの会社のトラックに乗りたい」である。もし担任が単に願いごとを書く活動という行為だけを意識していれば、決して書かれることのなかった願いである。

ほし組の11名の幼児たちは互いを尊重し合うという心情を日常の園生活の中で培い、担任の援助によって学級文化としての居心地のよい人間関係を築いてきている。担任に一人一人を大切にするとともに学級集団を育てていくという考え方が確立していたからこそ、今回の研究仮説(1)、(2)に基づく実践も一定の肯定的評価に結び付いたと、筆者らは考えている。

仮説(2)に対する考察として、七夕行事では、一人一人が願いごとを書いた短冊やみんなで作った様々な笹飾りを1本の竹に吊すという体験によって、仲間意識や協同性が形成され、自分が学級の一員であるという所属感を実感できる。幼児全員の手で笹に飾り付けられた短冊や飾りは、その象徴として見える形で幼児の心に刻み込まれているのではないだろうか。個々の幼児の願いは、日常の遊びや生活の中で自己表現と自己抑制のバランスをとりながら、様々な場面で様々な形で表出されている。願いの中には学級という集団に対する要求や人間関係についての不満といった切実な内容を含んでいる場合がみら

れる。担任はこれらの願いに対して問題解決という視点だけで受け止めるのではなく、自己肯定感を芽生えさせ育てていくという明確な指導方針や学級経営方針をもって受け止めていくことが必要である。もしそれができていなければ、筆者らが提案する七夕行事を保育に位置付けていく教育的価値も半減せざるを得ないと考える。

仮説(2)に関しては、幼稚園・保育所等で経験したことが小学校生活にも反映されていくことが大切である。そのため幼小接続の観点から、小学校の教師は自己肯定感の育成と関連教科等に関心をもつ必要がある。特に低学年の教科等で最も関連がみられるものとして、生活科と特別活動が挙げられる。

生活科については、究極の目標である「自立への基礎を養う」との関係を理解しておかなければならない。生活科における「自立」の意味については、『小学校学習指導要領解説生活編』²⁰⁾の中で三つの自立としてとらえ、その中の一つとして次のように意味付けされている。

「自分のよさや可能性に気づき、意欲や自信をもつことによって、現在及び将来における自分自身の在り方に夢や希望をもち、前向きに生活していくことができるという精神的な自立である。」(P13) (注:下線は筆者による。) 同書で述べられている「精神的な自立」は、幼児期に芽生える自己肯定感が基盤として培われていれば、より教科目標が達成されやすくなるのではないだろうか。また、内容(5)として、季節や地域の行事に関わる活動が取り上げられている。その解説として、行事における人々の願いに関して次のように記述されている。以下に関連部分を抜粋して引用する。

「人々は昔から季節の変化と深いかかわりをもちながら生活してきた。各地には、そうした季節にちなんだ様々な行事がある。また、地域の歴史や人物にかかわるもの、みんなの幸せや地域の発展を願うもの、さらには、地域の結び付きを強めたり、楽しみを増したりするために新しく創り出されたものもある。例えば、七夕や端午などの節句、立春や立秋などの節気、正月などの伝統行事、地域の行事などには、人々の願いや思いが織り込まれている。」(P31-32) (注:下線は筆者による。)

生活科には、教科としての目標や上記の内容(5)をはじめとした9項目の内容が示されているが、自己肯定感を育むことを目的として七夕行事を例示しているわけではない。しかし、幼児期に七夕行事で自分の願いごとを意識した経験は、その子にとっての自己肯定感の芽生えとして心の中に生きており、生活科でも七夕行事が取り上げられた場合、その子にとっては表面的には見えない幼小カリキュラム上の接続として学びを積み重ねていくことになると考えられる。

小学校特別活動においては、『小学校学習指導要領解説特別活動編』²¹⁾の中で、目標に示された「個性の伸長」に関して次のように説明されている。以下に関連部分を抜粋して引用する。

「『個性の伸長』とは、児童が、様々な集団活動を通して、多様な他者との人間的な触れ合いの中で、自他のよさや可能性に気づき、理解し、そのよさや可能性を互いに認め合い、よりよく伸ばし合うとともに、自分への自信をもち、積極的に集団活動に生かしていくことを示している。」(注:下線は筆者による。)

特別活動としての集団活動を中核に据えた目標設定であるが、「自他のよさや可能性」に言及している。このことは、幼児期からの社会性の基礎を育む経験の積み重ねによって育まれていくものであり、幼小接続の観点からも「自分への自信」として自己肯定感の芽生えを意識させ、より確かな自覚化が図れるまで高めていくことが、小学校教育として肝要と考えられる。

5. まとめ

日常の生活や遊びの中で、「こうしたい」「こうありたい」などの願いは、いつも子どもの心に宿っている。特に幼児期の子どもたちの遊びを見ていると、身近な人物だけでなくアニメの主人公や憧れのヒーローになりきって仮想の世界と現実の世界を楽しんでいる。筆者らは、幼児への関わり方として遊びの中において自分が願いをもっていることに気付かせたり意識化させたりする援助を行うことで、主体的・意欲的に生活を送ろうとする力の源泉になっていくのではないかと考える。こうした日常生活における自分の願いは、七夕行事での願いの意識化によってより強く自覚されることにつながるものであることを提案したい。

自己肯定感を育む教育の在り方については、筆者の課題として心理学及び教育学の観点からさらに理解を深めていかなければならない。また、幼児期の保育としての観点だけでなく、幼小の円滑な接続の観点からも小学校低学年の生活科や特別活動、特別の教科「道徳」を中心に研究していく必要があると考える。特に幼稚園でのアプローチ・カリキュラムや小学校でのスタート・カリキュラムの研究が進んでいる中で、カリキュラムに自己肯定感を育むことのできる年中行事を選択し効果的に位置付けていくことによって、子どもたちが幼小の段差や「小1プロブレム」をたくましく乗り越えていける力を育んでいけるのではないかと考えており、今後の研究課題としていきたい。

6. 謝辞

本研究に当たり、平成28年に訪問させていただいた東京都教職員研修センター、千代田区立九段幼稚園では数多くの御示唆や研究・実践資料等を提供いただきました。特に本研究への引用・掲載を快く許可していただいた東京都教職員研修センター所長出張吉訓様、千代田区立九段幼稚園長中村裕子様、また訪問に際しての調整及び研究成果の説明等で御指導いただいた企画部企画課及び研修部教育開発課の指導主事の先生方、千代田区立九段幼稚園前園長鈴木邦夫様、副園長野口悦子様、主任光枝祥子様に対しまして心から感謝申し上げます。また、実践研究では御理解と御支援をいただきました大和郡山市立平和幼稚園長藤村朱美様、研究協力者として意欲的に実践に取り組んでいただいたほし組担任角谷千春様にも厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 1) 国立青少年教育振興機構（2015）高校生の生活と意識に関する調査報告書：P11.
http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/98/
- 2) 国立教育政策研究所（2016）平成28年度全国学力・学習状況調査報告書質問紙調査：P158. P162.
www.nier.go.jp/kaihatsu/zenkokugakuryoku.html
- 3) 古荘純一（2009）日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか―児童精神科医の現場報告―. P30. 光文社新書.
- 4) 小林芳郎（2011）学びと教えて育つ心理学―教育心理学入門―. P101. 保育出版社.

- 5) 廣岡義之 (2014) 新しい教育原理第2版. P115. ミネルヴァ書房.
- 6) 梶田勲一 (2011) 自己意識の発達心理学. P1-32. 金子書房.
- 7) 奈良県福祉部児童福祉課 (1999) 人権にかかる保育マニュアル. P7. P22.
- 8) 文部科学省 (2011) 生徒指導提要. P210. 教育図書株式会社.
- 9) 文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領解説. P13. P81. P110. フレーベル館.
- 10) 厚生労働省 (2008) 保育所保育指針解説書. P24. P62. フレーベル館.
- 11) 文部科学省 (2017) 幼稚園教育要領. P5-8. フレーベル館.
- 12) 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領解説道徳編. P30. 東洋館出版社.
- 13) 文部科学省 (2001) 幼稚園における道徳性の芽生えを培うための事例集. P2. ひかりのくに株式会社.
- 14) 東京都教職員研修センター (2009) 平成20年度東京都教職員研修センター紀要第8号. P7. P9-10.
- 15) 東京都教職員研修センター (2012) 平成23年度東京都教職員研修センター紀要第11号. P6.
- 16) 千代田区立九段幼稚園 (2016) 平成28年度指導計画.
- 17) 千代田区立九段幼稚園 (2016) 他者評価シート.
- 18) 奈良県史編集委員会 (1986) 奈良県史第12巻民俗 (上). P422. P433. P462. 名著出版.
- 19) 奈良市史編集審議会 (1971) 奈良市史民俗編. P189-190. P208. P214. P218-219. 吉川弘文館.
- 20) 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領解説生活編. P13. P31-32. 日本文教出版.
- 21) 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領解説特別活動編. P10. 東洋館出版社.

参考文献

- ・ 佐藤淑子 (2009) 日本の子どもと自尊心—自己主張をどう育むか—. 中公新書.
- ・ 恒岡宗司 (2015) 幼稚園における「年中行事」の取扱いに関する一考察：奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要第46号. P33-53.
- ・ 恒岡宗司 (2016) 幼児期の年中行事体験を生かした保育の在り方について：奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要第47号. P49-70.
- ・ 東京都教職員研修センター (2009-2013) 東京都教職員研修センター 紀要第8号～第12号.

- 《目標》 ・自分の思いを出し合いながら、友達と一緒に遊びや生活を進める楽しさを味わい、関わりを広げる。
 ・身近な自然や環境と関わりながら、遊びを工夫したりする。

<p>幼児の姿</p>	<p>・クラスの雰囲気や教師、友達にも慣れ、安定して遊ぶようになる。また、遊具の保管場所や使い方も分かったり必要に応じて使おうとする。 ・数人の友達と関わりながら遊び、遊びの役割やルールを決めて遊びを進める姿が見られる。 ・砂場や水を使った遊びを通して、繰り返したり試したりしながら遊ぶようになる。 ・身近な動植物に関心をもち、積極的に関わろうとする。また、図鑑で調べたり飼育したりする幼児も増えてくる。 ・見たことや感じたことを様々な方法で表現しようとしたり、友達の思いに共感したり刺激を受けたりする。 ・プール遊びに意欲的に参加し、顔つけや泳ぎに積極的に取り組もうとする。</p>	<p>ねらいと内容</p>	<p>基本的生活習慣と教師の援助</p>	<p>☆衣服の汚れを気にせず遊べるように着替えを用意させたり、したい遊びにふさわしい身支度の仕方に気付かせたりしていく。 ☆手洗いや歯磨きの大切さを分かって取り組めるようにする。 ☆約束やルールを守って行動できるよう、その意味や大切さを感じられるようにする。 ○水遊びに必要な約束に気付き、守ろうとする。</p>
<p>幼児の活動</p>	<p>○いろいろな遊びをする。 ・積み木や運動遊具で遊ぶ。 ・ごっこ遊びをする。(遠足ごっこ、魔法使いごっこ、ニュースやさんごっこ、映画館ごっこ、ジュースごっこ) ・遊びに必要なものを描いたり作ったりする。 ・好きなセタの飾りを作る。 ・小動物の世話をしたり遊んだりする。 ・砂遊びをする。 ・泥だんごを作る。 ・水遊びをする。(色水、シャボン玉、泡遊び、種を使つて など) ・浮くものを作つて遊ぶ。 ・音楽に合わせて歌つたり踊つたりする。 ・巧技台等移動遊具で遊ぶ。 ○歌つたり曲に合わせて動いたりする。 ○描いたり曲に合わせて動いたりする。 ・自由画、課題画 ・グループ製作 ・父の日のプレゼン ト ・紙製作 ・七夕飾りや短冊作り ・粘土遊び ○絵本を見たり話し合つたりする。 ・遊んだこと ・お父さんについて ・セタについて ・時計について ・自分の夢や願いについて ・夏の空について ・雨・ツバメ など ○運動遊びをする。(鉄棒など) ○プール遊びをする。 ○園外に出かけたり、地域に触れたり交流したりする。 ・田んぼの様子を見る。 ・芋畑に行く。 ・賣太神社に行く。 ・小学校や保育園と交流する。 ○野菜の世話や収穫をする。</p>	<p>環境の構成及び教師の援助</p>	<p>行事</p>	
<p>○自分の思いや考えを出しながら、友達と一緒にいろいろな遊びを楽しむ。 ・自分の思いを伝えたり、相手の思いを聞いたりしながら遊ぶ。 ・身近な材料や用具を使い、必要なものを作つて遊ぶ。 ・水や土、砂などに親しんで遊ぶ。 ・運動遊具を使って遊ぶ。 ・自分の興味に合った絵本や図鑑を選んで見る。 ○自分の思いや願い、感じたことを表現することを楽しむ。 ・経験したことや感じたことを、いろいろな方法で表現する。 ・自分の思いや願いについて友達と話し合う。 ○身近な自然や小動物と触れ合い、親しみをもつ。 ・身の回りの自然物と関わつて遊んだり、身近な生き物や野菜を見たり世話をしたりする。 ・雨や曇、星、空などに興味や関心をもつ。</p>		<p>○遊んだ後の汗の始末・衣服の調節・水分補給を進んでする。 ○遊具や用具などを大切に扱い、使ったものは元の場所に片付ける。 ○手洗いや歯磨きの大切さを知り、丁寧にすることを分かって取り組めるようにする。 ○災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動しようとする。 ○雨の日の安全について、危険な遊び方を再確認をする。 ○水遊びに必要な約束に気付き、守ろうとする。</p>	<p>・遠足 ・保育参観 ・誕生会 ・交通安全教室・降園指導 ・カレーパーティー ・英語であそぼう ・プール開き ・学級懇談会</p> <p>家庭・地域との連携</p> <p>・家庭でも自然の変化に目を向け、子どもの発見や驚きを受け止めてもらえるように啓発をする。また、自然物や小動物、地域の情報などを園に提供してもらえるように呼びかける。 ・保育参観や学級懇談会、学級通信等で、クラスの様子や子どもの姿を伝えるとともに、家庭でも子どもの話を受け止めてもらい、家庭での関わり方を啓発していく。また、保護者の思いも知る。 ・母子家庭の子どもがいる場合、父の日の行事については園内で十分検討するとともに、保護者とも十分話し合った上でもち方を考えていく。 ・濡れたり汚したりした時のために、着替えを用意してもらおう。 ・夏休みの過ごし方について親子で話し合うように啓発していく。 ・園外保育で地域に出かけ、自分の住んでいる地域の伝統文化に興味や関心をもつ機会にする。 ・小学校に出かけた後、小学生や保育園児たちと触れ合つたりしながら、少しずつ小学校や小学生、保育園児たちに親しみをもたせていく。</p>	

付図1 5歳児指導計画Ⅱ期（表中の太字はセタに関するもの）

5歳児 ほし組 期間案 【期間6月19日(月)～7月19日(水)】

<p>前期 (5/29) 5/6 (16) の幼児の姿と教師の願い</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちが作ったツバメの巣に雛が生まれ、毎日その成長を楽しみに見てきた。いよいよ巣立ちのときが近づき、子どもたちは嬉しい思いと寂しい思いを感じている。子どもたちの気持ちに共感しながら、ツバメと子どもたちとの関わりを引き続き大切にしていきたい。 ・ツバメの物語をみんなで作ってきたことから、その創作話をペープサートの映画にして遊んでいる。まだまだ見せることを意識して動かすことは難しいが、友達に見てもらっても楽しんでいる。また、映画館ごっこに必要な物を作るなど、映画館という共通のイメージをもちながら遊ぶ姿が見られる。友達と共通の目的をもちながら、さらに相談しながら一緒に遊びを進めていく楽しさを味わってほしい。 ・ツバメ新聞を発行したこと、園内で発見した様々なことを新聞にして発行し、各クラスに配達することを楽しんでいる。今後も様々な物や事象を発見する面白さや誰かに伝える喜びを味わってほしい。 ・砂場では桶を流しながら温泉作りを楽しんでいる。その中では年中組と一緒に取り組む様子が見られる。異年齢の関わりを大切にしながら、年長児らしくリードしている姿を認め、年長児としての自覚を高めていきたい。また、梅雨期が終わって暑い夏に入っていくので、開放感を味わいながら、存分に泥や水の感触を楽しんでほしい。 ・植木鉢や畑の夏野菜が実り始め、親子で収穫を喜ぶ姿が見られる。収穫した野菜をいただく嬉しさやありがたさを味わってほしい。 ・梅雨期に入り、空模様に関心をもちつつある。このまま、夏の空や雲、夜空の星にも興味を広げ、七夕にならなげしていきたい。 	<p>環境の構成と教師の援助</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちが十分に工夫したり試したりできている時間を確保する。 ・友達と協力したり相談したりして遊びを進めている姿を認める。また、同じ目的をもつ友達と一つの遊びをやり遂げた満足感を味わえるようにする。 ・プール遊びにおいては、健康状態を細かくチェックする。また、プールの安全管理、衛生管理にも配慮する。 ・それぞれの頑張りを知らせ、自分なりの目的をもつて試したり挑戦したりできるように促す。さらに友達と刺激し合っ楽しんでるようにする。 ・自分で工夫したり試したりしながら遊ぶことを楽しめるように、いろいろな材料や用具を用意しておく。 (しやぼん玉作り、色水作り、泡ケーキ作り、浮く物作りなど) ・水や泥などの感触を十分楽しめるようにするとともに、遊びが発展するよういろいろな素材や用具を用意する。 ・七夕に関わった素話や絵本に触れ、七夕や夜空の星に興味をもてるようにする。 ・ゆったりとした雰囲気の中で、一人一人の思いや願いを大切に受け止め、なりたいたい自分や夢への期待感を膨らませる。 ・友達の話や思いや願いにも、興味をもって耳を傾けられるようにする。 ・夏の自然事象について興味をもてるような図鑑や写真などを準備する。 ・栽培物の成長や変化、収穫を幼児と共に喜ぶ。また、教師自身、興味や関心をもって幼児と共に世話をしながら声を掛けていく。 ・楽しかった1学期をみんなで振り返るとともに、夏休みの楽しみや過ごし方について話し合い、それぞれが夏休みを楽しめるようにする。
<p>ねらいと内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ○友達とのつながりを感じながら、一緒に遊びを進める楽しさを味わう。 <ul style="list-style-type: none"> ・互いに思いを出しながら一緒に考えたり工夫したりする。 ・同じ目的をもつ友達と一緒に遊びを進める。 ○友達と一緒に水遊びやプール遊びなど、夏の遊びを十分に楽しむ。 <ul style="list-style-type: none"> ・全身を使って思い切りプール遊びを楽しむ。 ・友達を刺激を受け、自分なりの目当てをもって取り組もうとする。 ○七夕に関心もち、友達や親と一緒に飾りを作ることを楽しむ。 <ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな笹飾りを選んで作る。 ・自分の願いごとを喜んで話したり、友達の願いを喜んで聞いたりする。 ・星や天に思いを馳せながら、自分の願いごとを短冊に書く。 ○夏の自然事象に興味や関心をもち、季節感を感じる。 <ul style="list-style-type: none"> ・雨や雲、星、空などに興味や関心をもつ。 ・栽培している夏野菜の成長や収穫を楽しみながら世話をする。 ○1学期の終わりを知り、夏休みへの期待感をもつ。 <ul style="list-style-type: none"> ・身の回りの持ち物や保育室、遊具などをきれいにする。 	<p>行事</p> <ul style="list-style-type: none"> プールびらき (20日) 保幼小交流 (23日) 英語で遊ぼう (29日) 誕生会 (30日・14日) 体位測定 (3日) 火災避難訓練 (7日) 七夕 (7日) 保育参観及び学級懇談会 (10日) ナラジュエイクアウト (10日) 平和げんき広場 (16日) 終業式 (19日)

付図2 ほし組期間案 (表中の太字は七夕に関するもの)

